朝夷巡嶋記　第三編　一

イ13
938
~~36~~11

門才13
939
38

曲亭馬琴著

朝夷巡嶋記第三編

歌川豊廣画　文金堂蔵兌

朝夷巡島記第三集叙

稗官小説述作之巧虚實紛紜使無如有莱唐自恣寔無端倪也余少游戯翰墨世人悞認以為新奇書肆懇請亦隨至於是觀變化於流俗之際而弄筆費紙寫其風韵情致以老於閭巷葢以此不睡不食苦心於案上又以此釣名徴利以畜數口者有年矣其所為豈足取笑於大方哉質弱多病素不勝檐薪偸食之民不得已而爾也雖然漢藝文志有

稗官。錄閭里瑣言云爾。自是以降。街談巷說。雖史官有取焉。風俗僥醲。好奇走新。至於今和漢新研之書。什而小說居八九。坊賈捷利者。由時好以揣刻也。昔人謂藥八百八味而能毒相半矣。是言亦可以譬於野史稗說。其談詭譎。雖則有誣世之害。又不為無醒蒙昧之功也。其勸懲主治也。詭詞猶藥毒也。自非醫愚俗之神者。豈可得擇採以施於人耶。昔嘗有其人。姬周老莊。印度釋氏是已。世代迥降至元明之際。施羅兩才子出。竊因循道釋之善巧。盛建赤幟於傳奇中。後之稗官者流。剽竊摹擬。習而不及焉。猥褻呈媚而勸懲彌遠矣。所云若僧尼孽海。金瓶梅。隋史遺文。肉蒲團。諸書。宣淫導慾。莫甚於此。又不可使聞於婦幼。頃朝夷巡島記第三集。藁方成書。肆文金堂請嗣梓。因述此事。代序以自警焉。

文政改元立炑前一日。題于飯顆山前菰淵北畔著作堂。

蓑笠漁隱

朝夷巡嶋記全傳中輯第三編總目録

第廿一條　待宵小姐蜘　誓的垂柳絲

第廿二條　賽俳優名簿　月下翁赤繩

第廿三條　引友小松宿　吻途轍江鮒

第廿四條　山院古塔婆　駒形老淫婦

第廿五條　色思孀婦鳥　欲海和尚魚

第廿六條　山神洞夜雨　信夫舘隱簑

第廿七條　鸞鳳日蔭花　副將晦之月

第廿八條　平泉役敗北　假賢相赦書

第廿九條　夷使沐猴弁　衆兵大夢覺

第三十條　嵐庭連理木　遇春羽生梅

此編第二十一條以下為中輯二十條以上為初輯其總目見初編及第二編巻端繡像之右

文字揚
人のくにハ人なあらえひを
やしらのうりきたるあり
笹姫
修羅五郎
経任

青玄
馬糧標吉郎
煎鍋の尻もさぐれつ
くさりくひはまを
峯上よるく夜の鹿
黒萩

小悪勿作況大悪乎
天口兌〻黙使人言

城戸三郎守詮

矢塚達六

推了車子過河提了油瓶買酒錯只錯在自家難向他人角口

足利左馬源義兼

蘇塗鶉東二暴道

信夫荘司元晴
水草十郎昌重
神井鬼六猛虎
蝉貫九郎
水上浮
萍隨
浪去
何分
南北
與東西
鳴江
嘲竹

列傳姓氏畧目

初編起元暦元年正月
至編迄建仁三年二月

全傳
朝夷三郎平朝臣義秀

將相
將軍源頼朝
將軍源頼家
駿河前司廣綱
吉見冠者義邦
足立盛長
相摸太郎泰時
源義仲
足利左馬冢義兼

將種
源範頼
六條藏人仲家

武臣
和田義盛
北條義時
大江廣元
稲毛三郎重成
狩野冬祐茂
刀野儀杖照時
結城七郎朝光
宇佐美三郎茂光
信夫荘司元晴
北條時政
内田三郎季吉
海野太郎幸氏
岡田冠者親義
多賀藏人光仲
橋太左衛門尉高保

家臣
江龍口廣通
大夫屬重能

梓治部烝有友
湯嶋太郎進基勝
名栗節平元廣
菊川萬作良忠
鰹堀小頓太
下河邊小三郎高吉
城戸三郎守詮
海老尾加世丸
江三二廣光
伊庭捌九郎敦俊
矢矧二郎景茂
青日戸舟九郎綱道
鰹堀小珍二
八嶋室平師任
水草十郎昌甫
蠟貫九郎
當麻太郎武弘
磯貝十郎員幸
五十良子三太季宗
鰹堀圖内
間中隼人守直
腰越獣六郎
高階兵衛師勝
糠田八作重正
江小三二
馬糧標吉郎嗣忠

浮浪
健田秀作
義士
伐江豊六
農士
苗四郎
畷一二
稲向判五
菓二郎
引太郎

婦人　尼御堂如實　幡多前　菖蒲孝臣　且見姫　筐姫
靭繪　牧方　栞手　友鶴　淺良井　判五妻姓氏逸名
梭枝　鳴江　蛾竹　鈍佛　黒萩　文字搨

浮屠　筠長老　卜繕　賽玉

厮役　根丈　莖平　切刀平　決丈

悪棍　山主麿平太　越赤熊太　夷守水六　臭水沼太郎
三九二中太

逆賊　修羅五郎経任　刀野太郎時夏　蘇塗鶏東二暴道
神井鬼六猛虎　鐵盾矢藤五重連　珍浦五十五六方相
早蝿五頭丑　矢塚達六

右初編より第三編に至る。四編以下。新しき姓名は追てこれを録すべし。終

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之一

東都　曲亭上人編輯

中輯第廿一

待宵の小姐　蜘蛛
誓の的乃　垂柳　絲

却説媼子并平は雷上動の名弓に。兵羽透羽の箭を含そえて。且見姫の寝所のおかこよりうち衛りてをる程に。夏の夜なれば短くて。丑三ごろよりけて。時は卯月十日あまり。甲夜ばかり半月魂の傾くに。ゆんえひども初杜鵑音ぢて。南の牖より珠簾隙漏る風は涙かと。蝋燭は照りそよて。糸繰掛蟋蟀の宿とも見えてみやびたり。浩然は寝所のかたよ姫うへ驚れまひぬと。い声間近く聞えしかば。并平は今こそと食りる矢をとり絞りて。弦音高くうち鳴し。古実に従ふ墓目の法。形のごとくに執行ひつ。一世の浮沈ここにあり。

效験いかにと問ふ時しも、寝所のかたより出来るものあり。是則別人ならず。甲夜に井平に案内せし桜枝なり。要こそあれと迎へとりて、姫がうへのことさりとは異なる事なりしか候やと問ば、桜枝はいとゞ心づかしく、瞼さる面色にて、されば そのかたに侍りし只今、和衣が呼ぶしのひし弦音に夢のひて、われこそ来つれと騒ぎのへ人の顕れしるにやあらんと、あまりに程遠かりしかん枕方に立よりて、屋壁をおゝめなへせし老女達みないへり。疾とをさへと誘ひしが、井平は蟇目の途ならずなりしと、ところ遠くて今更に一発に及ばざりし。いろく執こゝろえよりいそくといひはくも、ましてやさる性なりし、弓箭携て桜枝が後方に随ひてゆく程に、僅に小房一間を過れば、且見姫の寝所なり。当下桜枝は慈禄をし。開きて後方に立かゝり、彼屏風の内にこそ姫かへり。をちかるゝにつけて、ちよき手りて加持まゐらせといふ声さへ、ようち、矢を井平を衛と推遣りて、ひきとゞむるに於

襖戸を外のかたより、そと開きかれども、井平は一切その故を知らず。桜枝が内にいらざるは、物の怪をおそるゝなるらんと、思ふものから、いぶかしさは且見姫の枕方に看病人はひとりもあらず。衣桁に掛し桂衣は韓紅の色濃く、龍田の秋かと疑ふ。錦の張の短檠は燃え、いと幽にて草に落る蛍に似たり。張文成が撰する遊仙の窟ならば、紫式部が筆におもせし源氏の君の来る夜なるべし。いかで姫ならで侍女們に謀られたるには、あらざる歟かや。尼公の仰ありしも鏡の背の梅かなぞ。人にはさんせぬ姫御達のおん枕方に、この夜を暁さば、柳下恵ならざるもの疑ひざることやは、あるべけか。益なし、と呟きて、襖をひらきて出んとすれば、臥房の内より且見姫あや。喃ともし、と呼とむる声は、さながら当夜の夜飼の笛の節に初音して、遠方ひて出る一夜の笛、奇南は春風に颯と吹入て、初鶏の花匂ひあぼまらぬ滅せぬ残の雪かかる素手をさけ袂を捕で、あからめ

との限り。女よりてらわる海じたりのそも笑まこん。拵せこんと戒遍う。ゆよ
仏を窮めても。鬱結釋ぬ縁糸の。糸と苦死物とひ下枝の黄葉色ゆ出て。
峯上の猿と音ゆで鳴く。恋ゆやまと同くもでゆ病の床ゆ伸ーゆまの。ある
だうりある歎きさと。いうでまのぶハえでもふね。老よもくうきうもゆ。
ゆハきのふけふのをゆ。なでゆこの地へ来ゆせーゆ。物ゆの窓の明暮よ。
厠窺ーより忘れぬ面影さゆ寄ゆくふ寤てらう。夢ゆもふ結ぶそ
娯ー紀狩衣の露の情を掛烏帽子。一下際目ゆ晴衣の晴ぬハ雲の答
ゆで。両夜の月と。ゆまゆ。ゆた偽りの物の怪ハ。ゆ惑ゆ胸の烏夜。
暁てゆもー紀の実守ぶ。ゆ東のゆも弯ゆくまゆた。ゆくまで来なゆら
今ゆよ外へ翁矢ハ。はまてゆも。掲ぬゆまひハ百昌く。濱の真砂子ゆ数
ゆよ。女浪男浪ゆ家ゆゆの紀。汀清の泡と消ゆまで。仇ゆハいでゆへを

べき。ゆよ鳴くとゆきゆ口説く。声ハ口隠ゆ練の被衣ゆ紀ハんえねども。
尾花ぶ袖ゆ風戯ぶ。葉ゆ童縁ゆ葛の袋ゆ。見点ゆる叢蔭ゆ屡吟く
鳥のまゆびあへぶ友呼び求食風情ゆ。色好ゆこの男児ゆりせば。清ふ
水津ゆ再。いゆとゆいべき時宜ゆ。ゆらねども。美人をんでも後又の如く。
情を楽ゆめ欲を誡め。色ゆ惑ゆぬ大丈夫の。ハ金石些も動ゆぶ腹
たくーさゆ声を。ゆり立ゆみぶゆうゆ。ゆーゆ紀ゆん峯動。怪ーゆるゆ紀ゆうけゆゆるゆめ
ゆれ。菖蒲の尼公のゆん憑こ。脱く路のゆ紀ゆくんもん物の怪ゆ紀ゆんこゆめ。
墓目ゆこそ候ーゆれ恋ゆ。ゆゆん情ゆ。僕ゆもどぶ知ゆるゆこゆハ放ゆ。
掻遣て出んとゆる紙又引留めゆそハ情ゆ。ゆつゆ。ゆゆ。ゆゆの紙ゆいゆゆゆの。
孤ゆーゆいゆゆん。ゆゆの涙ゆ頼事ゆの。ゆゆハ。ゆゆ紀ゆ存命ゆ。ゆ人ゆ
面ゆゆぶ紀ゆと。ゆ覚期ゆゆて。ゆゆ。ゆゆゆ又ゆゆ。死ゆ賜ゆ。ゆゆ

あへど刀の鞘よりを懸ゆくハ井平睨て推禁めもの尚物ゆや狂ひゆかいと
うとうとの紀伊さの恋ひを結めて某ぶまうにと狂ゆゆ〳〵恋よ貴族の
差別ゆ〳〵或ゆ思念の外といひ〳〵ハ好むものゆ常言のゆ世よ所さるべき
事ふハ待ふ〳〵ようそれとても砌つハ〳〵紀縁ゆあぶ結びもせん君ハ正〳〵く
源氏の上猶廣綱朝臣のもん女児槐門貴族の家中よゆゆせゆふべき
ものゆ匹夫よ惑ひて閨隙を窺り播を踰かんやそれこそおんらゆのまゆぶ。
仇又祖の為ゆもゆゆゆさ恥辱なれ葉滅よ不司ゆれども義の為ゆ身
命を惜ゆ仇ある恋よ連係せられて縛頭列らるんハ亡後よでも怨ゆべ〳〵
井平不便と云ふ〳〵ハ放還さゆへゆゆゆふ〳〵ハ欲ゆと辞を弾て渝〳〵
てもいひまゆらへても法ゆゆ涙よ濡ゆ鞘よゆを掛ゆるまゆに身を倚て接
えゆふうんと狂ひゆへバ井平殆ゆてあゆ〳〵暮目のゆも食ゆへゆを引つ掖れつ

爭ふ打外面よ窺ふ人あり。紙門を洞とひらゆゆて。奸夫淫婦を縛めよ。
と烈〳〵ゆ声よ井平ハ吐嗟とゆゆうゆんゆ〳〵ハいつの往ゆ廣綱朝臣
長袴の裾蹴うへて背よ直躬と立ゆゆ左右ゆ両老臣間中隼人守直
下河邊小三郎高吉紙燭を秉て隨ふゆゆ且見姫ハ又君の声音ハ素よりゆ少
ゆうつ。ひゆ〳〵紙門よ立遂ひゆハ流ゆ〳〵や面ゆやと衣ゆ身ゆ〳〵引被ぎ伏沈
ゆく徒ゆハ井平ハ暗ゆくぬゆ。ものゆ燈を起ゆゆうゆく愧て頭を擡ゆゆれゆ廣綱
怒ゆる声を激〳〵ゆゆれ井平ゆ汝ハ既よ骨相書をゆて索ゆゆく罪人ゆる成。
吾祖母の尼憐ゆて墨染の袖ゆて掩ひ一ゆよび去てゆゆゆ〳〵ゆゆ
かゆゆふねゆん慈愛ハ再生の恩値遇の福その方ゆゆよ身を偶せて畏ゆ
をゆべゆゆよ何ゆや且見姫よ懸相て奥ゆゆ渝び入り。賸ゆゆ家の重器ゆる。
面上動の弓。兵羽水羽の箭を盗ゆて姫を伴ひゆゆゆんとゆゆゆゆよゆ狼狽よ

手を噬るとは世の常言にこのことなるらん。憎くても尚悪く飽ぬ嗚呼の
白物かなと罵るものハ、轡を並べて頭を擧、縁由を知召されバ、おん疑ひハさる
ることながら、然れども匹夫も亦志氣あり、奸夫盗賊といへども、あるよしの恥辱を
受べからず。且へ参りしものでのなる紙ぞ擇めん、最も某身の暇をたまわり、加賀の
小松に赴きて、吉見冠者を索しかども、更にその蹤跡もなく、竟に得遭ざりけるが、
其処にも彼処にも、其骨捐書を掛られて、穿鑿嚴重なりけれバ、要時の
露命を繋ん為に、藍王院に立かへり、再び尼公の見参に入りしハ、蟇目の一矢を
御らんじハ、姫うへの物の怪を禳ぜんとての所為なり。抑も上野なる五十保の
温泉に浴さんとて赴き給ひしに、家臣達も倶に扈従し、或ハ遠江へ赴きて、
果敢て志たがへぞなく、汝を頼むと仰せなされ、御せを志がく、固辞なりし
かど、なほ得懇に諭したまへバ、終に固辞あへずして、御導者に擬ミ、甲夜より

あくまねどと、能も無く徳もなき身の、及ぶべき事にはあらず。頼政卿
より御相傳ありと傳聞く、雷上動、兵破透羽の弓箭を備へぞそ。
物の怪ハ鎮らじ、と云ひけれバ、尼君ハ且く受ひき。おん疑ひを釋んと
ならべみづから尼公に問せ給へ、分明にせんといひけるもあへず、廣緒ハ呵々と冷笑ひ。
そハ汝が尼君を欺きたるにぞあらんずらん。それハ五十保に湯治して
十日あまりの日をかさねしが、奴隷まで又兒女輩を留まらせされバ、ほかの
もとなく、俄頃にかへる今宵亦間中隼人守直も遠江より歸着せり。
しかるに宿所の為体、さながら淫奔の事のきこゆれバ、窃に窺ふに、直見が臥房に
密夫を捕ても、世にハ面なき親の恥辱、さらぬ心に愉しとハせざりし廣緒
なりんにハ赦さるべき奴ならねど、栄枯得失の界を離まで、羽生の窟に
世を避るから、今更刃に衂らんとハ、亦是なくろに愉からねバ、汝を

向べき事あり。よるさへ来よと呼びいけて。書院のかたへ出ゆくぞ。間中
下河辺の両老党ハ。莽平が傍より弓翁を拿。弓をうち捉つ。犯人を推立
まわりて。おん前に牽居ぬ。当下廣経ハ弓翁をおくへと寂しせて。又莽平に
うち對ひ。汝且見が物の怪を禳ん為に。この弓翁を尼公に備用せしといふ。
そのものハ実なるべし。相傳の縁故弓翁の名目神あることさへよく知りての
所為なるらん。あらずそれハ弓翁を備るとも要なし。何の故に雷上動。兵破水破と
名付けしぞ。疾くいへ。ゑんと膝を進めて詰りよれバ莽平ハ畏りて袖を合せ。
さらバ弓翁の真実を未熟匹夫の生才学にて。何でか覚え期べきといへども
弓翁ハ頼政卿紫宸殿の頃より怪るを射まいらせしとき昔語を
よるまえて名弓翁の威徳を借らんとおもひしのみにや。と陳じければ頭を
うち掉り。などかくらじ偽るならん。あらずそはいかなる所為皆虚言と。

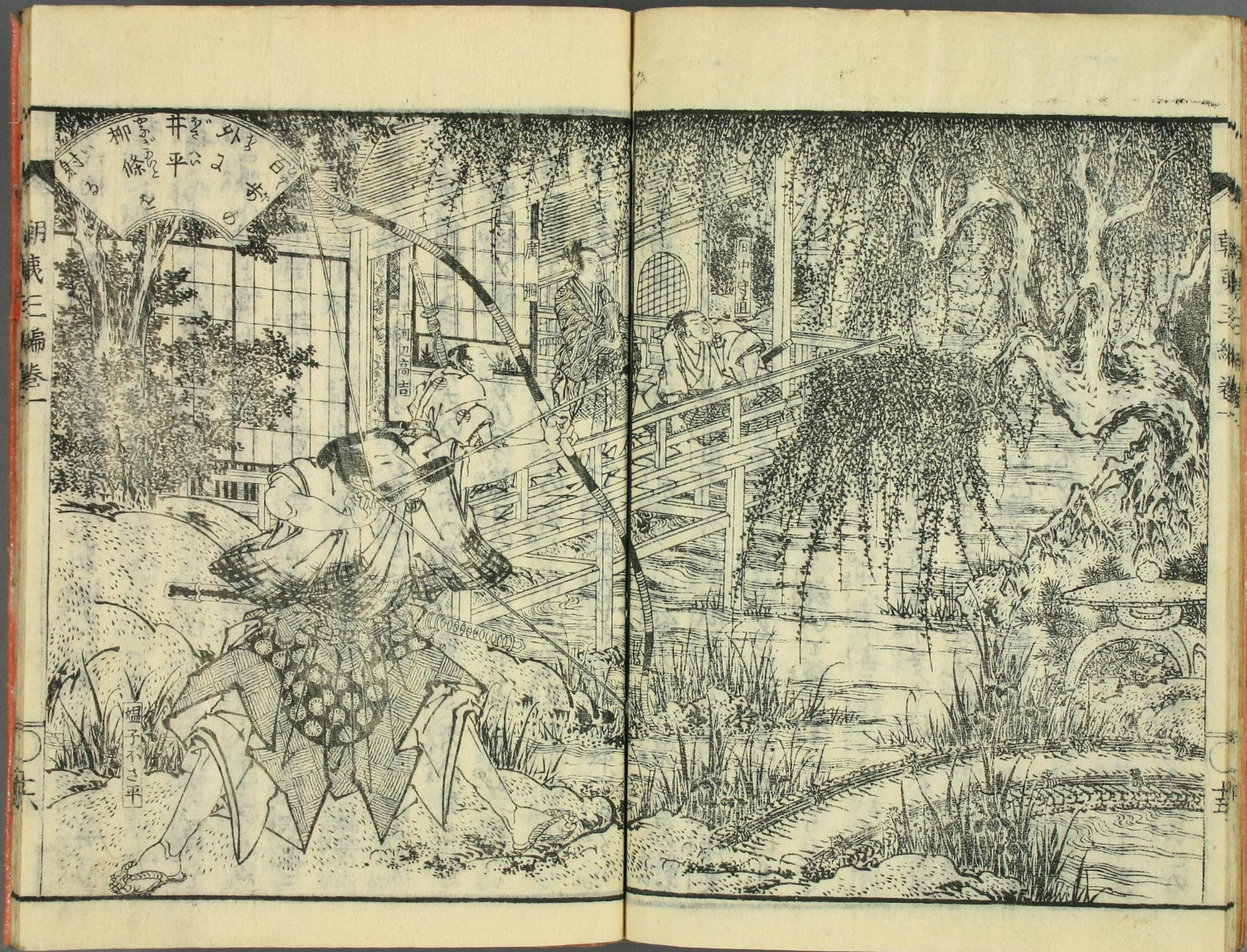
いへ且ぬるの歟と。譴めしへバ高吉守直左右より。謙退辞譲も支ふぞよる。
才を惜せのたバとて。あさはかなる外に外にまで。問せのたハはからうおそかめ。答申さぬ
るゝなど諭せバ莽平沈吟し。小人罪なし。懐に玉を抱きて罪ありとハ僕が
事なるべし。お疑しからねおん弓翁を備まいらせんがこそ。おん疑由一ト通ちかせ。
孰に脱るゝ路ハなし。さらバ且そよりとおもひして笑ひ来ものかん某藤倉に在し
とき弓馬の師匠に咄ることあり。弓ハ原その形を月に表してこれ陰とし。又
箭を矧ひく弯ときハ圓くして陽となる。この時ふして日に表せり。陰陽こゝに
相感し激して遣るハ弓矢の功なり。猶南山の雷のごとし。雷ハ陰陽二氣の發して
弓翁の徳もさるをとおなじ。あまつさへ周易に考まさバ雷地より動くときハ艸木の
萌牙し。混虫ハ出づ。さればハ雷水解ハ二月の卦なり。解ハ散るなり。釋く。屈さる
ものこゝに伸び。縮したるものここに開く。解の時懿なる哉。君子ハこれによりて

進むべく。小人は退くべく。怨も釋べく。讐も亦滅ぶべし。既已ふさの德あり。さんがその弓の重孫を。初陰二陽。三陰四陽五陰六陰と卷き丁ハ雷水解の全爻を。表セにあらざる欲。うてもりまる鬼物を。二氣の凝偉ま成まる。解まあらざんが散滅ぶべし。彼紫宸殿の怪鳥乃ち雷上動の武德をもて。射て隕さんの宮ま所以あり。これそれ弓ハ名けらんれる。緣故まそもあるべき欲。又水羽の征箭ハ。鏑の目ま。さ、紙りて適ま声あり。声あるものハ是陰あり。兵羽の征箭ハ鏑ま目あり。さ紙りて適ま声あり。声あるものハ是陽あり。漂ハ則箭の由く声欲。水ハ無声乃ち徂あるべ。その兵羽と書。透羽と書く。字義ま拘るべくもあらざ。かれが弓ま陰陽あり。箭ま亦陰陽両儀あり。陰陽亦文武の義。乱るべ。武を亦征。治るべ。文をもて化。弓を並べて琴。そ、ぶ。古聖の所作。とおもへば。弓箭ま文武の德を具ま。唯武器とのみ。この文備あり。この武備あり。賴政卿ハ良將なり。その弓箭ま伝へあり。殿ぶ武弭弥が世尊ま法問。とハ議ま仰ぶん欲。省ま。ハ宮ま嗚呼あり。ぶるま俗説ま不審あり。その弓箭の由来。

鐵つけ。る紙ん。ひ。その書ま云。秋設々ま名。ま。弓箭あり。水羽兵羽雷上動と名つけ。り。此ハ是養由基が所持の物。彼養由ま楚國の人。秦王の時ま當りて。迦文珠の化身。一日文珠菩薩。艱由ま名あり。これ汝ま一德を教んと。件の弓箭を授ま。この度ま艱由弓を取。ると。ハ鳴雁忽列を乱。花名弦ま應。て隕。り。養由既ま七百歳の齡を歴て。天下を見案。ぶ。ま唐山ハ。とぶ弓箭を。傳んと。ぶ。のま。ぶ。て且。ぶ。ぶ。ぶ女児の。椒花女ま授。ぶ。躯てその身ハ空く

去りぬ。椒花女壽命竭んとせるとき。弓の矛子を索ふ。遠く日本國よりの。摂津守頼光見えあり。一日頼光朝臣假寐の夢の中に。椒花女忽然と天降りその父の事。弓箭の由来を。巨細に告げて汝に護きをるべしといふとおもへば夢は覚ぬ。頼光四下をうかがふに。件の弓箭傍に在り。頼光これを獲てその射藝養由基に劣らざりき。頼光こゝを以て我國を伝へ。我國を以て我經を伝へ。我經を以て仲政に伝へ。仲政に伝へ頼政に伝へ。子孫の相傳あること五世に至る重宝なりけり。頼政卿はその弓箭もて鵺の怪鳥を射て隋の名を海内に揚げひとかたに伝へるといへり。されども佛法を中國に伝ふ。漢の明帝のことなり。東周戦國のとき。いまだ文珠菩薩の化身といふ。甚不審し。且養由基。楚の共王の臣なり。晉楚の両軍戦ふ

とき。養由基は北の枝に追ふ。乱箭に射殺されぬ。渠が七百の齢をたりぬといふ。いよ〳〵不審。又その女兒椒花女が事。唐山諸史百家の書野史小說もこれを記せず。是彼もつて無稽の說欤。いまさのみ詮次をもて家說とうけがはず。疑ひを釋ぬ者ひなからんと。おもふ〳〵ものかな。廣徳朝臣は洗〳〵と。少年毎に歎唱してやまとことば小膝を礒と拍。吁奇才なるかな。この壯伎當今多くはなく〳〵。その弓箭の来歷は養由基なりをきへるのみ。世俗附會の說なれば論ふべくもあらず。我邦は仁徳の御時に盾人戸田宿禰あり。桓武平城。嵯峨の三朝に仕へ。坂上田村丸あり。近くは同宗義家朝臣及保元の八郎爲朝皆是名弓なり。弓箭を慕んで。其人ぞ。弦の說推て知るべし。兵羽水羽の矢のうは実に波がいるとは。この


朝桜三編巻一
堀子かさ平
丁河辺高吉
唐畑
同中守直

弓は初より。雷上動の名あるを取りぶ。弓ぶ組又三位入道雷水解乃
封々を本つたこの弓を造りしかくべ。弓人かそれを親摸ふ。
蔡と唱ふ。うらんを乎うへ頼政こ。ちろれども子孫こそ。その祖の尊を
物よ呼んいと悼おるとるのれが。先考仲綱朝臣彼弓人ふ。この弓衆
示しつ。雷水解の誼ふりて雷上動と呼びうえたまひき。れ政孫と
雷上動と同音ふ。てその誼よ摘へり。別る子細ハ名ぶ。と解諱
のふふの。并平ハ身ふ係る。発をも忘れて感嘆。膝の進ぶ
なり。廣綱かるひて。汝ハ古の弓箭の名目。古実をさ考ふ。これを
ゐて物の怪を。攘んとおもひつる。墓目の事ハいふぞや。と問まてゐる。
慚愧ふ堪ぢ。さい墓目の法ハ。その家くふ口伝あり。某も亦拳ひ。
師傳を受てゆくも。真法ありや。虚実ハ存ぜぢ。夏の墓本を写るふ。

ひ。婚河の帝御悩ぜ。療治祈禱も経験ぜ。そのとき
公卿会議あり。武士をゐて寝殿を警固ぜ。と一決。八幡太郎
義家朝臣ふ。ぞと仰らる。八幡殿。この弦をうけ。ひらりと倚羅ふ
裝束る。下ハ清倉の分甲。て。弟九年後三年陸奥の合戦ふ。駒
のくる弓箭と帯。南殿ゐる大床ふ立踏つて殿上を。且佶と睨て清和
天皇四代の後裔。多田新発意満仲が孫。伊豫守頼義が嫡男。前
陸奥守源義家大内を守護。ちる。縦悪霊鬼魅ありとも。ひ。ぞ
障礙をゐたゝ飛ぶん。ぞ。罷退けと高声ふ名乗うけて。弓強を三度
呼ぶ。ゐ。殿上も階下も。毛骨弥竪だりん。かくて御悩ハ立地ち。
癒ぶぜゐひ。ぞ。ぞ。こて墓目の溢觴ゐれと人ハをきくまらるる。
さるゐのひ。ぞ。それも虚実ハ去りゆんぞ。うち突るハかくのと。

といへば廣縁うち領き。既よ汝が才あるとその学問ハ戎こゝろいまさ
その技をえたゞ。汝この弓箭をもてゝ揖を的と射て當ハ淫奔の咎
なくとせん。又その的を射外さバ。汝がこゝろ操をこゝろ。淫奔の罪免ゝ
天ハ明らかとおゞめるぞ。さらくといそぶ。さくよづくゝ弓箭を遁与
のゝ。高吉字直こゝろぶく。障子を開つ。縁頬あゝ。両戸殘さゞ繰
ひゝけば。庭の塀を出る者の。声も漸こよ数ゝて。天ハきゝくゝとゐるふ
ゝり。井辛ハ辞をるにゝ。弓箭を受て檐下ふ出。かさねゝの御難顔
いとおゞつゝあれ所ゆゑれども。おのゞ一箭の的答をもてゝ。ゝん疑ひを
釋ゝん。願ゝかゞ。ゝき僥倖ゝ。何をゞ拡と仰上ゝ。廣縁も殆近ゝ。
立出て揖を瞻仰。井辛彼処の柳をゝゞや。ゝゝ楚の養由基ハ。
百歩の外ふ抑葉を穿ゝといひ傳ふ。ゝゞ朝戸田肩人ハ織の肩十枚

あゝゝ。推累ひて射徹ゝゝ。皆ゝ射藝の神ゝゝのこゝそれ稔ゝそ
至ゝゞとも。吾指を的ハ彼処よゝ。彼柳の梢ふこそ。北へ向る衆枝を
離ゝて。纖く垂る弱條ゝ。こゝ衆幹ゝゝ一尺殘ゝて。只一箭よ射て
落せよ。ゝゝゝんゝハ汝がゝゝ稼ゝる行ひ。ふ潔白の人と
ゝゝんゝくせよかゝと扇をゝて。遥よ抄を示ゝゝ井辛ハ當惑の既を
雲時傾げゝ。そハ切て親を改め。及ゝゝゝとゝるゞゝ。推辞ハ不義の
奴とせゝる。進退究まゝゝゝ。運を試ゝゝ。笑覚
あゝゝ。一礼ゝて。弓よ箭をゝゝ刻へ。下河邊高吉ハ間中隼人と
目を注せ。井辛ハ口ハ才ゝゝ。七八十歩のゝゝゝ。糸ゝゝ柳の
條を射ゝゝ。ゝゝゝ。叶ハゝとゝゝ。幾遍も。辞ゝゝ
ゝゝゝ氣ゝの。彼面ふ顕ゝて。ゝゝの中ハ陷ゝゝ。ゝゝゝ井辛ハ。

左右のくゝ弯も裳さゞ。本貫信濃の諏訪の神社故郷迫江乃
多賀明神を。宮中ゟ祈請しつ。且く用る日をひゝた。仰さゝゐ月を
反して。弓を満月の如く弯固め。矢声をうけて丁と射る。鬼違ひぞ杪る。
柳の小條を一尺殘して。弾弗と射切らう。條ハ上ゟ冴一そ化の邉平
戸ぞ冴う。茅ハ冴ゟ遥ゟ假山のたゝみさの芝生ゟ立ゟれつ。高吉寸直
ゝ見を見ゝ。云ハゞも声をうけ。吁。射ゟ〻とりろ共ふ。扇と拔ゝ
立かゝゟ。髮の後毛素ゟゝそ。あゝぎ立ゝび芹平ハ弓挾ゝて小撫を
突立あゝの氣炎を伺ひゟ。廣綱感嘆儀かゝゞ。舊の如ふ退ゝて。
媼子ゝ。と召ゝび。芹平ハ阿と応つ。且假山の母とりふいあれて。箭を
拔ゝ。ゟふ柳の小條を。そり添て進ゝゝんば。下河辺高吉ハ恭〻〻
受取て。栗ふ色を約め。間中集人ハ柳の條を。廣綱ゟ入せゟり。

主役頻ふ芹平ゞ。射藝を誉て已ゞゟ。かゝて廣綱ハ芹平を。ゟ〻
近く招ゝゟ。これ初ゟ汝を。一器量あゟりのゝとゝつ。ゝんだ。
ゟゝ人を知ゟゝとハ。尭元年もゟ。これを病ゟ。且亦甚年ゟ疑ひあり。
その時汝ゟ仕ゟ。又下野あゝその馬伴ゝゞゟゝ。ゟゝ〻と知ハ素ゟ
その罪ふあゝゞゝゝとゝも才あるゝの。口あゝて汐ひあれハ。古今ゟ
ゟゝゟ。辨佞ふゝて才の非を飾ゝ。奸曲ふゝて賢者を誣斯のゞゝも
亦ゟ尋ゟ。去ゟゝゞ北條刀野ふゞ行ふゝとゝろを。悉非とゝゞゟ。唯
汝ゞ落命を悉ゝとゝゞ。ゝがゝしゝつゝゞ虚実を試ん。と云ひゟんゝゝゝ。
吉見冠者ゞ跡を慕ゝて。加北へ赴ゝゝとふゟ黙止ゟう。ゟ又ゟ求ゟ
ゝゝゟゝゞ。如此ゝふ謀ゟゝゝ。と藍玉院ふ示ゝゟゝして。ゟゝ為ゟ侯ハ
果ゝて来ゟゝ。これゞ墓目ふ假托て。且見ゞ色ふ綉ゝゝ。ゝゝ兵家ゟ所云

を權あり。されば六韜の選將篇ふめるぞや。こゝを言を以てそのその辭を觀よ。こゝを窮るふ辭を以てその變を觀よ。これは與るよ。間諜以その誠を觀よ。明白顯問ふてその德を觀よ。いまこゝを使ふよ財をもてして。以その廉を觀よ。こゝを試ふ色をもてして。以その貞を觀よ。こゝを告ふ難をもてして。以その勇を觀よ。これを辭ふる酒をもてして。その態を觀よ。この八徵備つるとき。賢不肖別るといふ。固て廣綱竊ふ謀ふて。佞ふ烏帽子裝束させ。家子伴ふる弓箭を。辛ふ備ふ。こゝろ驕ふ否を觀ん爲。これを誘引ふ。且見姫ぶ色をもて動せ。その貞ふ否を觀んため。五十保ふ湯治ふ。老堂もみふ在ぶ。といふせ。間諜をもて誠を觀ん爲。弓箭のふ實。蜜目の射法彼とふ。此とふ。諸ふ問ふ明白顯問。もてその德を觀ん爲ふ。八徵の中四徵を行ひ。竊ふ其辭を試ふ。義服ふ愛ぶ。重器を沒て。誇ぶ色を觀ること。蔑ふ。巧言艶語ふ動ふ。廣綱ふ問事毎ふ。響の物ふ應ぶ。形如く。辯舌泉の流るに似ふ。加以百步を隔て。柳の絲を射て斷ふ。

ふ是ふ。苦ふ難をもてして。以その勇を觀ふ。是ふ。今こそ疑心氷解ふ。和郎ふ。空ふ落命の人追捕嚴密ふ。とふ。その罪ふ。あらざりけり。然ふ。況ひとり廣綱ふ。執念深ふ。疑ひて。賢者を陷ふ。まで。欺詐のふを彈世ふ。事を好むふ。似ふ。れども。ふ。その才を愛ふ。のあまり。捨ふ。紀ふ。ひあり。惡意もて世ふ。ふ。あらねど。須臾も苦ふ。余ふ。僻事ふ。おりけり。と心隈ふ。く勸解ふ。へ。并ふ。ふ。廣綱ふ。士を愛ふ。滅ふ。感涙を禁めあ。ぐ。いふ。人の言葉ふ。士ふ。已を知ふ。

あくまよ死。女ハ己を恥ぶりの、為ふ貌るといへり。某ハ狩場の雑子こ。
さる紙慈恩ふる母生さり。何をとり報ゞ者ゝん。宿世の中に値遇ふる
弗いと欲ゝくこそといふ。城ハ辞ふあゝられさり。當下間中下河辺の女
老嬢ハ。又更めて井平に対面。送ふ名氏を告聞して。久後ゝを契
ゝり。或待旅ゝを廣張ハ復井平を呼び近つけ。既ふかう打釋て公色こ
果べ給ふのゝ。且見姫を再びゝん。且見ゝこと。召めゝ阿と応てらぞ為る
ゝ。衣裳ハ胥のゝ匂て。見姫ふ異ゝねも既ハ月額刺さげ。いとをゝげる
男ゝこふ褄撫取り妍き生て。西老嬢ハ次ゝをり。彼ハいゝと問ゝつゝ。えかう
えても井平ハいまゝごろを沒ぶり。ゝもとそあゝめと主侍ハ笑ゝ向ぞおゝる。

中輯第廿二

月下翁の赤繩　賽能優の名簿

そゞ中ゝ廣綱ハ笑をいゝさ老ゝく彼男子を井平ふ指一际。媼子ハ渠を
恐ゝり。彼奴ゞ假名ハ且見姫真ハ海老尾加世丸と呼ゝ。童形ゝ
召使ふゝ賢カゝねゞ偽ゝ。才のけゝども愚ふもあゝゞ。接樂をゝて
嗚呼のゝ。嚮ふも流蒲世ゞ。竊ふ其汗を武つるゝ。婢女们をゝて
をゝといふとも。真の吾女児ゝて。其汗を臥房へ誘ゝて。淫奔を海るゝし。
男女の親疎ハ憑ゞ。情ゝ由て心動ゝゞ。詭の汁も遂ゝ真の密會ゝん。
さゝハ可情壯佼を陷ゝ。罪ゝ非ゝ。
このゝ狐いゝで謀ふゝもゞ。と左往右来ゝひつゝ。さて加世丸ふ如此こと。
謀を流示ゝ。婢女们ふもてゝろひさをゝく。彼奴ふ且見ゞ長嬢を被せ。
被衣ふ面をゝうち掩せて。燈燭暗き臥房ふをゝをゝ。ゝ其汗を
撓ゝあさをゝて。密語をいゝをゝ。けゝゝふゝゝぬりのゝ。その肺肝を

ぼさ平
加世九
そなたのやふみのうとうるゆれ玉ゆ
太田の里乃秋のよれ月 信天翁

先ゝ〻べ。幷平更ふ驚れこんて。氣色合らる額を按ゆ〻まそれそうを。用ひられ〻ハ自他の幸ひ。感謝ふ堪ざじゃといへば加世丸進こ出客人昨夕ハ舌なるさとの限りもこれ主命ひこ憚よいひき宮ふ兵ハ流の。みち奥安積の沼ふ生る。蒲姫ふあくぬ旦見姫旦見て恋ハさあぬ〻。けハ見素の牽出物ふ入。物体ふ〻の姫うへの名をいつかりし遥姉ぶ。首取てゆと長ゑ袂ふ隠〻ふる。假髪の髻結搔垂こいざ実撥こ。さー出せぶ。幷平ハ堪うね。笑の中ふ挨拶を廣徳もおるこて。加世丸よ。汝ぶ癖欲今ハ様楽せぶもこれ。媼子てろふかけふれる。彼ハ己ぶ道世せー次の冬。建久二年十月。夏の情をおろうせとて鎌倉へ遣せ。もみ〻きさ二十七日ふ端ゆ〻幕府ふ恐尺て適使とよ〻ろう。賢愚ものゝ差あれども人を使ふ必方あり。役ふたざる人ふ〻ことよいうあと問めべ。

幷平ふ〻〻感佩。敗鼓の草をも貯るハ。便名医の用心あり。一ニ平をもよく鶏ふハ。亦良将の用心ゆ〻んと稱おうせば加世丸ハ愧て頓ふ退巡せ。當下高吉守直ハ齋一主君よおうふ安。昨夜より此彼と心を用ひこもゆへ。ばさそそハ疲労ゆひけめ。媼子ふも早飯を。勧めひなやとふ廣徳吹てうち点ふ周公旦の聖ゆるも哺を吐て客を迎へ髪を握て士よりれり。況廣徳。ゆ人を得ようり。何でふ疲労をおがゆべき。但一圓居ふ入奥〻く。饗應を欠ふ仰ようり。早飯を勧めよと婢女们ふ伝へうしこれもあるあく相飯せん汝達ハ罷出て。休息せよと仰きば高吉守道加世丸ふハ唯々とーて退きつ。厨ゆも豫てよりろ。准備ーてけまば。女童ふづ楊盥ふ温湯汲こ入且て。賓主ふ養歯を勧る狂ふ婢女们ふ〻〻膳をゆて来て居ようり。幷平ふ〻〻辞讓て。席ふ〻ふをり。饗食膳既ふ果ーふば婢女们ハ。

退きて四下の人のをそれあり。廣綱が折こそうけまとて又幷子を据
まを。僧あるものいと苦くて向べきの紙問ざる。其汗が操金の勢権が
仕ーるの及下野なる足利へ追遣られて刀野時夏が家僕ふせられを又
信友の為ふ罪人となりしを藍玉院のもん物語ふ伝へ聞ところし。
去るんどもその親い雅といふを紙去ぶ。その進止を見て推せば野人
四夫の子ふあらず世ふの惜るとあるもこれあ隠さるべくもあらず。
名告のいと正育ふ向ときく幸幸莞爾ふとうち笑ところ向ぜあるべた。
おもあらべや上んと豫てあ思ひひき数あるねども某ぐ父が樋口暴光こ。
木曾殿対きをひ比兼光も亦誅らるこの時某僅ふ四歳乳母が抱き
養育して十年あまり沢近江ふ送り時政ぬふ邂逅して彼人ふ仕ふた。
始をいべが如此ところ。終をいべ簡様ことと媛子と名告ー縁故よさ

時政ふ仕るを預ーかべ思ひーるの時夏が隠慝さ。潤ふ演説ーさく
いふ。某ぐ思ぐ足利ふて愛顧せられ吉見冠者が蒲殿のもん子こ。
又朝夷三郎義秀といふ猛者が則勒給ふ産ーるの和田殿の三男あり。
こをも亦故ありて幼稚ところ父ふ弃られ乳母が里ふ人となれども将帥の
器量あり。実ふ文武の英才あり。ちろ彩ふ某幸ふ友垣結ぶて紙ひて送ふ
素姓を告ぐんども。朝夷ねんと某といまぐ親族の欲びを竭さんぬ。ちい
送ふいべぐ。親のもふられべあり。殿が故さ〜士を愛ー厄を救ふの仁心深
かり。彼二方も罪あるして今厄難の中ふあり。その往方ぐ定るべらでふの
圓居ふ縁あれば送憾くいとといひうけて嘆息を廣綱もはらはらとゆて頷よ
嗟嘆ーつ。その人を加んとあるべ且その友を見ぐといふ。古人の格言果せるか
ろれいまぐ吉見朝夷を去ねども其汗をんて彼人をも亦雋傑あるんと

きゝ入り。現樋口と今井と鞆絵とハ兄弟こゝ。さんゞ其許ハ朝夷ゞ母ゞ属て
従事するゝ。それを送ゝ若ざるしハ卒尓ゝ猶しゝ。兼光ハ木曾ゝ浸まて。
降人となりて殊せゝれ。鞆絵ハ和田義盛ゝ再醮せり。かゝれゞ義盛勇士の
為ゝハ。親ゞゞも愧ざゝんや。徒ゝといハぬゝの故なゞ。ゞれも兼光。
鞆絵も當時武勇ゝ名高し。難ゝ臨て阿容ゝと命を惜むものゝ事ゝ。
鞆絵ゞこゝろハゝるゝゝなけれど。兼光ゞ降系ハ清水冠者ゞ為ゝ世ゝ欲。
ゝゝゝゝ蜀漢の姜伯約ゞ孤忠ゞとゝゞ。兼光対て義高ゝ入間川
ゝて害せゝる。こゝ且ゝ亦天ゝり命ゝ。傳ゝ。樋口次郎中原兼光ハ權頭
兼遠ゞ子ゝり。兼遠ハ信濃の豪家世ゝゝゝる武士ゝり。木曾ゞ
義兵を起せゝ。兼遠又子ゞ羽翼ゝゝり。和殿ハ則兼遠ゞ孫。兼光ゞ
子ゝといゝ。ゝゝゝ眼もゝるゝとゝり。と憑ゝゝ壮夫ゝるゝ。就て又一策ゝり。女児

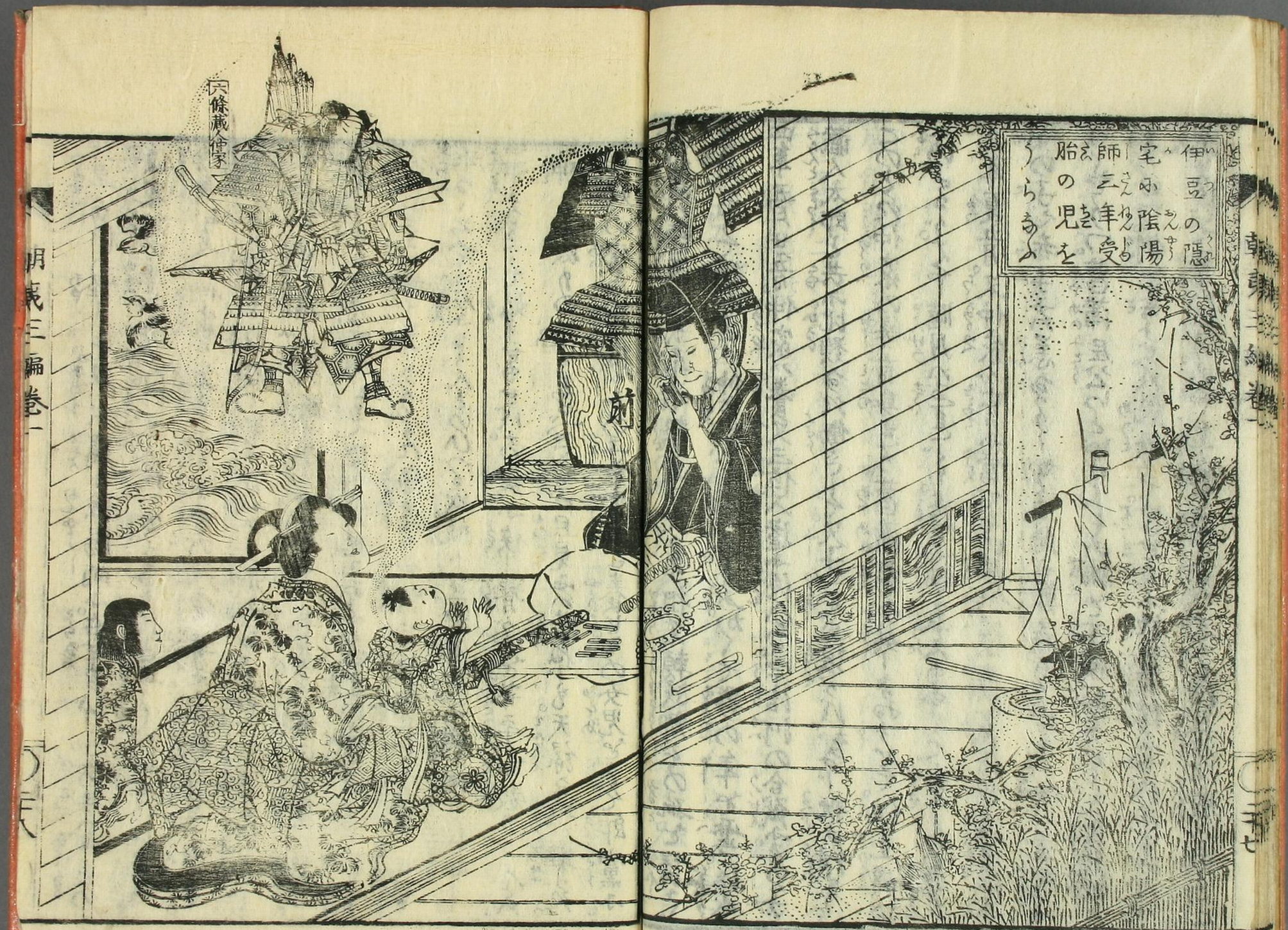
且見ゞ事ゝりし。年ゝゝゝく閑ゝんゞも。故ゝりて。いゝゞ婚縁をゝう結ゞゞ。
御ゝゝれ。和殿を試ゝるとゝゝゝ真の且見ゝ逢せねゞも。その名ゝゝ紹ゝゝ
ゝゝ。こゝ且ゝ亦天縁ゝゝゝ。頼ゝ和殿ゝ女児を妻せ。歌作らせゝる密諾を。
信言とゝゝゝんとゝゝハいゝゝゝとゝゝゝて并平顔赦ゝゝに額の汗を推拭ひ。
ゝゝゝひゝけもゝゝ。仰を兼りゝゝりのゝゝ。君ハ正ゝく源家の嫡ゝ世を憤り迹を
埋めて。鄙の田舎ゝとゝりゝゝゝども氏貴く位高ゝり。某樋口ゞ子といゝとも原
ゝゝ木曾の老黨ゝ。將卽をゝりて士卒ゝ混ゞ。夜光をゝりて泥中ゝ擲んゝる。
いゝ情かゝゞゞ。加旃某ハ慈善の家ゝ露命を繋ゞ。今ハ形餘の浮流人
ゝゝゝゝゝ同輩の女児ゝりゝも。妻を要ゝゞゝりのゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ戯まても
変ゝゝゝゝ。物体ゝ。と怨ゞゞゞゞゞゞ閑亮哉ゝ竊聞のゝ。菖蒲尼公ハゝゝ
嗟ゝゝ。桜枝ゝ紙門をひゝゝゝて。徐ゝ進ゝ入りゝゝゝ。廣縣ハ忙しゝく。席を立て

扶掖并平もこれ迎へて。襖の上に居まゐらせんべ。掖枝にゐのこころを
ゆるして。紙門を磯と引あけ。そぶき内に入ざりけり。當下尼公は茫然
并平をとゝんかうこそ。やはその男子よこの尼法師が年甲も愧ぢ。忻ぶと
さそはこそうふ挾しけんそれも和殿を廣綱よりゆるしせん為なりし。唯其
佛の方便とこひとりて許せし。和殿は樋口兼光が一子であり。よの成旦見が
壻ぐ丸。望ゆる人とし。褓褓の中より膝に居守育る曾孫なんべ。佳
壻欲得と豫てより。おのれざるたあふねども。廣綱は故ありて。下さい受領を
辞せ。草ふる田舎ふ。これぞとゆり人も行ぬ。且見も亦情頼あり。
生涯人ふ帰せど。この尼ぐるる浸ふ。蓋玉院の後住ともなさせのとうき
只流。これも亦不便なりやや故あるるあるとも。尚未ゆる未遍女子を。
いとぐり尼ふせるべさ。そなかうさるひ不楽とる。尼ぐゆる紙汲とて。

廣綱は初より。和殿をゆぐく試うこの人をとゆ〳〵親の口から
白地よ婚縁さ〳〵ふ後をるるんぞ。ゆる紙なる推辞まんは。人の信をゆるぬふ
似ゆうけ〳〵ゆ。と叮嚀ふ渝しゆべ并平は。席を避て額をゆる数なるね
家を世ふあり。息ふかゝは殿なり尼君。壻ぐ丸ふとまで思ゆ。ふん慈愛は
須弥なる低く。大海も浅かるべし。ゆゝ紙去ては日光も照さね并平が生死
ふゆゝをゆゝ任せまゐんば。何をゆる推辞ゆ。ゆんゆゆゆゆも夫婦は人の大倫。
その傳ふあるべて情ふ逼ぶ不縁の基狭只い〳〵遍もこのゆるゆ。ゆりひ
かへさせのゆ。とゆゆゆゆうさぶ信もゆゆ。義もゆゆりのと云ゆんゆ姫上の
ゆん為ふ某媒妁つゆゆゆん。その壻君は別人なるべ。吉見冠者義邦なゆ。
今某ぐ伶俐ふゆゆは只彼君の愛顧ふ答。忠誉ふゆゆゆ義邦ねゆゆ
蒲殿のゆん子なゆんば素ゆ貴。青年ゆふ十八歳。温順ふゆて文武ゆ

才あり。ちゝも容止美麗ゆて并平が類ふあゞ。今こそあれ後に芳迹
のゝこの君ゆゑ。り某が孫ふうつて。その婚縁を待ーゆゞ。彼の暇を
ゆゆうて。そのびくふ在処をたづゆん。この孫ハいくゞと信ざちて。いへバ尼公ハ
頭をうちふり。否その婚縁ハ望ーかゞ障るゆふゆゑ。且見が年紀を
十八と。嚮ふいひしハ方便ゝ実ハ今茲二十ふなりぬ。和殿ふ一歳劣る欲。
義邦十八家ゆゝ。且見と年紀も相応ーかゞ。整ゝ況ひとゝ。
廣綱既ふ世を避るゆゝ。蒲殿の子を壻ふせゞ。人の譏言ゆりとゆー。
整うゝ化を求るとろハと恨良ふゞ。ゆえのゝ。理りゆれゞ并平ハ。
困ゞ果て歎息ゝ。廣綱ハ。その氣色をうて。ゆゝ媼子。このゝゝ辞ひて。
且見ハゝゞ女児ふて。実ハゝゞ女児ふあゞ。渠ハ六條藏人仲家が遺腹子
なり。仲家ハ。帯刀先生義賢の嫡子にて。木曾義仲が為ふハ兄なり。

義賢ハ。悪源太義平ふ殺ゝ。比ゝゞ祖父頼政卿。その孤を憐て。
養ひそうて猶子とゝ。仲家とぞ名つけゆゝ。かくて歩の年を歴て。治承
四年五月廿五旬。仲家ハ。養父三位入道ふ倣ひつ。宇治河の合戦ふ。その子
藏人太郎と共ふ比類なゝ働きして。父子一足も退ゞ。枕ふ対ゝ。
このとゝ仲家の妾有身ゝ。菖蒲前ふ具ーゆゝ。伊豆國ハ
流るゝゞ。臨月ハゝゝ。産る。ゝ氣色ゆゝ。三年ゝ寿永
元年夏五月。又仲家が亡日ふ當て。その母俄頃ふ産の氣ふ。産ゝ
女の子ゝ。赤子ふ恙なゝ。殊ふ難産なりけゝ。母ハ當産ふ
なりつ。菖蒲尼公ゝ。その孤を不便がらゝ。且見姫と
名つけつ。側を去ゝ。乳母ーて。字せのゝ。祝ふ廣綱ふ女の子なりけれゞ。
ゝゝして養ひそうゝ。年来を過ーゝ。ゝゝ且見ゞ腹ふあゝ


伊豆の隱宅ゟ陰陽師三年受胎の児をうらなふ
六條藏人仲家
前

三年ありしの怪しそ。尼公は竊ふ陰陽師ふ。占せのひよこの子は成長の後家隷の妻ふるゝん。終焉の地は定らあらぬと正しくいひをうれもやう。今更ありへ仲家が身ありける木曾の殘黨芹子。和殿ふ見姫を。妻せんとて殘せるゆ彼ト巫よ符合せり。亦寿あらぬやと正直ふ説示し。のふるん菖蒲尼公は酸鼻。仲家あり。且見あり。実の子。実の孫ふ。異ありざり孝順を。あり人は世まあその老の宿寐ふやかくま。そのかゝるは姫ふ幸ありよんん縁遠き恢ふ狡叔父の木曾亡ぶ。形ゐ〜そんてゝ尼ふるゝんとひつる狡彼ト巫の事さ明ら地ふ流示し。二十ふるゝで嫁ふせもせだあ絃ふ俟し。壻ふ芹子。和殿ふるゝんと。神ふるゝぬりの雅ふもるべき。おゞ且見ふ昔ねゞも天縁ふれば瞳ふ。夫婦の愛も想像ふ。その子を家臣ふ養せ。その女児をあて郎黨ふ。妻ふるゝ世ふ多ゝり。ようや和殿は北條ふ憎ゝるゝあり。ふも刀野ふ追ゝ人ありしも。孫会の將軍家ふ弓を弯ゝる名ゝねび蒲殿の子の貴て上ふ忌ゝ筋と異あり。廣綱ふ壻ふ。さのこ憚ることゝ侍ゝじ。追捕の沙汰は後ぞとも。ト。さび尼ふ法衣の袖りて。掩ひ。人を出さんやとゝうはようてあんゝとかゝるゝふ渝。のゝは芹子頷ふ驚嘆。文兼光ふ繋ぎ。比某いまゞ東西を。辯ぶひゝゞ。仲家朝臣の事ありどは浸ふ戻ふ哭るのこ。細ゝは新ぶひゝ。今は脱ゝ路もゝ。仰ふ隨ひゆん欲さりゝゞ婚姻はいそがせのふゝふもあぶ。但蔭ふようて世間の廣くあるもあぶ。その時ふてゝもかくもといふを廣綱推禁め。媼子。そいひひるゝ。公治長の篇を誦ぶ。環綬の中ふ在といへどもその罪ふあぶそその子を以妻せ。聖人の私ゝぶ。

とゞ心既に決せり。間中守直下河辺高吉ホホも。夏の頃巨細に告げて。二人に一人媒妁させ。近日に吉日をトべし。且その日まで益王院に侍うて旅寝の疲労を治すべしと。ちうるしうやと期を推て結びかけうる赤縄。出雲の神の所為なるべし。かくて尼公八堂を。二つ三つ四つうらはらし女の童を召近つけく。茅平に湯を勧めさせ。又墨衣八表の物かくりに時移て午の見ふくころほひなるに。夕膳に尼ぶ蒔まで。あるでせんとて茅平を渡引立てかへりかひぬ。

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之一終

早稲田大学図書館
011888007263